



# 全体主義はなぜ生まれた のか

---

ハンナ・アーレントを手引きに



# 全体主義政権による全体的支配

---

- ・全体主義指導者の支持は、ただプロパガンダによって人為的に作られていただけでなく、本物の人気を博していた
- ・大衆運動やテロルに威嚇された大衆の支持が不可欠
- ・実際にヒトラーの政権掌握は民主的な憲法のすべての規定に照らして合法的であった

# 終点のない淘汰

・全体主義運動は大衆運動であり、組織形態である

・政党：国民国家の諸階級を政治的に代表する

・運動：幾百万もの人々を擁して初めて運動たりえる、比較的少ない人口の国では成立不可能

→全体的支配の機構が絶えず要求する甚大な人命の損失に耐えるだけの十分な人的資源を小国は持たないから

# ネガティブな人口政策

- ヒトラーの諸計画：非ゲルマン民族、スラブ民族、ユダヤ人も根絶に関するものが大半。しかしドイツ民族も対象とされていた

## →優生思想

- 帝国保険法：心臓病や肺病の患者を持つ家族をすべて住民から隔離することを提案
- 共同体不適合者法：罪を犯していない人間を強制収容所に送り込むという、警察の「慣行的な権能」を法制化し拡大させようとしていた

# 大衆

- 共通の利害で結ばれていない、特定の達成可能な有限の目標を設定する個別的な階級意識を全く持たない
- 人数が多すぎるか公的問題に無関心すぎるために、共通の利害を基盤とする組織、すなわち政党、利益団体、自治組織、労働組合などに自らを構成することをしない人々

- 潜在的に大衆はすべての国、すべての時代に存在し、高度な文明の国であっても大抵は住民の多数を占めている
- 通常時代には政治的に中立の態度をとっており、投票せず政党に加入しないことで満足している

# 大衆の誕生

---

- 大衆は一つの階級社会崩壊の産物
- 階級社会と政党制：個々の人間が公的問題に参加する仕方  
も程度も、彼の生まれであるどの階級に属するかで決まっ  
ていた
- 階級的帰属を決定したのは彼の生まれ

- 階級構造の瓦解とともに、各政党の背後に立っていた無関心な潜在的多数派 (silent majority)は、絶望し憎悪を燃やす個人からなる組織されない無構造の大衆へと変貌
- 絶望とルサンチマンに満ちた個人からなる大衆は、第一次世界大戦後のドイツとオーストリアで急速に膨れ上がった  
→原因: 軍事的敗北とその諸結果の後のハイパーインフレと失業



## 大衆社会の個人の特徴

---

- 他人とのつながりの喪失→Verlassenheit(見捨てられた状態)
- 根無し草的性格
- 徹底した自己喪失

# ソ連の粛清

- 階級無社会の名において少数民族の清算とソヴィエトの破壊→諸階級の清算
- 農民階級：潜在的にソ連で最も強大な階級。数の上でも最大
- 生き残ったものは、国家権力に対抗しうるいかなる集団的連帯もいかなる手段も存在しないことを学ぶ。一人一人が絶対的な孤立無援な状態となり、権力の意のままに扱われる存在となる

- 農業集団化: 集団農場に追い込まれ絶望した個人は、誰がどうの手先かわからないため、すべての人間が相互不信に陥り、集団としての意識を築けなくなる
- 階級の絶滅: 官僚も労働者も同じ身分と化した  
→あらゆる身分が粛清されえたから
- 国家、軍、党のいかなる機構も「粛清」の行われなかった所は一つとしてない  
→たとえ自分が高い地位にあったとしても、いつ粛清されるかわからないという状態に陥ることで、自分が特権階級であるということすら信じられなくなる

→根無し草的性格

# Verlassenheit(見捨てられた状態)

- 家族、友人、同僚、知人の全てや共通の文化的関心なども断ち切る
- 内部に何らの相互関係を持たない大衆社会
- 単に孤立しているのではなく、自分以外の何者にも頼れなくなった相互に異質な個人が同じ型にはめられて形成する大衆社会が成立

→全体主義は全権力を振るって何者にも阻まれず自己を貫徹する

- 粛清が繰り広げられている間に、自分自身の信頼性を証明する手段は一つ

→他人を**密告**すること

- 密告：普通の人間関係に含まれるすべての人間を巻き込むこととなる
- したがって他人と関わることほど危険なことはないという状態に陥る

→**Verlassenheit**

# 忠誠

- 運動が機能するための本質的な心理状態の一つ
  - 「忠誠が完全に抽象化されて内容を失い、狂信主義の極限まで落ち込み、各個人を結びつけ、この世界に繋ぐ絆そのものと化す」
- 絶対的孤立の中の間人、根無し草の状態に陥った個人によって果たされる
- 忠誠の対象は運動そのもの

# 全体主義運動が民主制に示したこと

---

1. 一国の住民は全て公的問題に積極的な関心を持つ市民であり、それぞれに共感を寄せている政党がある

→ 民主政であっても住民の多数派が政治的に中立で無関心な大衆であることがあり得る。

2. 大衆は政治的に中立で無関心

→ 民主政は意思表示のない統制不可能な大衆の声にも依存している。(silent majority)

# まとめ

1. 大衆は潜在的に全ての時代に存在し、自分は社会にとっていつでも取り替えのきく存在であるというアトム化、また家族や友人などの周囲の世界から完全に孤立した根無し草的性格、これらによる徹底した自己喪失に陥り、共同の世界から「見捨てられた状態 (Verlassenheit)」に追い込まれる。
2. 運動自体に「忠誠」を捧げることで、他人とのつながりを喪失した個人は自己の世界での居場所を確認し、全体主義運動の成員として運動に加わる
3. 民主主義の中からも全体主義は生まれる可能性がある



## 参考文献

---

Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*  
"Totalitarianism", First published by Secker, Warburg,  
1951(ハンナ・アーレント著, 大久保和郎・大島かおり訳, 『全体主義の起源3 全体主義』, 東京, みすず書房, 2019,)